

【三重】ロボット支援手術のリモート症例見学をスタート-近藤英司・三重大学大学院医学系研究科産科婦人科学准教授に聞く◆Vol.1

2022年4月22日（金）配信 m3.com地域版



ニュースメールを登録する

2021年に「da Vinciサージカルシステム」（ダビンチ、インテュイティブサージカル社）を用いた、ロボット支援手術のリモート見学をスタートさせた三重大学大学院医学系研究科。同社が提供する「インテュイティブ テレプレゼンス技術」によって、リアルタイムで見られる映像は、実地と遜色ないという。三重大学でロボット支援手術の取り組みが始まった経緯について、三重大学大学院医学系研究科産科婦人科学准教授の近藤英司氏に話を聞いた。（2022年2月16日インタビュー、計2回連載の1回目）

▼第2回はこちら（近日公開）



三重大学大学院医学系研究科産科婦人科学・近藤英司氏

——三重大学大学院医学系研究科産科婦人科の地域での立ち位置を教えてください。

1945年の創設以来70年以上にわたり「地域に貢献し、世界的な研究を行う」という方針のもと、多くの産婦人科医師を育成し、三重県の産婦人科医療を支えています。周産母子センターにおける産科学、婦人科病棟における婦人科腫瘍学、高度生殖医療における内分泌・不妊学と3部門で診療と研究を行い、それぞれに充実した指導スタッフを配置。母体・胎児専門医、婦人科腫瘍専門医および生殖医療専門医が取得でき、女性のヘルスクエアに関しても学べる、総合的な産婦人科医師教育機関です。同門会医師数は200人を超え、三重県を中心に日本全国で活躍しています。

——近藤先生が医師を目指したきっかけと、ロボット支援手術との出会いについて教えてください。

親が産婦人科の開業医だったこともあり、幼少のころからその姿を見てきた影響で、産婦人科医を目指しました。医者になってからは産科も担当してきましたが、手術が自分に合っていたこともあり、専門として婦人科を選択。特に、ロボット支援手術に興味を持っていましたので、取り組み始めました。

腹腔鏡手術を執刀してから常々、今後は低侵襲手術が開腹手術に置き換わり主流になると感じていて、多関節機能や3D視野を持つロボット手術が必ず腹腔鏡手術を凌駕すると考えていました。当科では、ロボット支援手術を選択される患者さんが多く、子宮体がんに関しては9割にロボット支援手術で行っています。

ロボット支援手術の特徴は、開腹だと見づらい箇所も、カメラで奥深く入ることができ、より詳細に部位が把握できることです。ロボット支援手術のほうが、人間より細かな動きができますので、傷が少なく、出血量が少ないといったデータもあります。例えば子宮体がんの開腹手術では、骨盤の奥深くの患部をのぞき込むような姿勢で行わなければなりません。ロボット支援手術では負担が少ない姿勢で対応できるだけでなく、視野も確保され目の前で手術部位を確認しながら手術することができます。

画面のスイッチングなど、ロボットならではの独特な技術は必要ですが、腹腔鏡手術のラーニングカーブより、ロボット支援手術のほうが安定するまでのラーニングカーブは短いと言われています。

——三重大学でロボット支援手術が始まった背景を教えてください。

三重大学でロボット支援手術がスタートしたのは2013年。初めに泌尿器科に導入され、現在は泌尿器科以外に産科婦人科・外科でも手術に用いています。産科婦人科では年間に約120件のロボット支援手術を行っています。

保険適用となった同時期に、術者のライセンス取得のための指定症例見学施設にも認定されました。ロボット支援手術を行うには、術者のライセンスが必要です。現在は開発元であるインテュイティブサージカル社が提供するトレーニングコースを必ず1回、全国に7カ所（2022年3月現在）ある指定症例見学施設のいずれかで受講する必要があります。

三重大学が指定症例見学施設になったのは、本学が多岐にわたる婦人科疾患において、多くの症例実績があったからです。2017年3月から開始し2022年3月現在で約360件、その内訳は子宮体がん・子宮頸がんなどが180件、子宮筋腫・子宮頸部高度異形成・子宮脱などが180件です。私は主に悪性腫瘍を中心に手術を行っていて、特に子宮体がんの実績を多く持っています。

——ロボット支援手術のリモート症例見学が、2021年に三重大学でスタートした経緯を教えてください。

2021年6月に本学の関連病院との間でリモート症例見学を試験的に実施しました。6月と10月には北海道や九州など全国の医療施設から見学を受け入れ、本格的にスタートさせました。

本学がロボット支援手術のリモート症例見学施設に選ばれた理由は、私が『子宮全摘出 ロボット手術のキホン：補助アームを充てるda Vinci手術』（メディカ出版）を上梓したこと、ロボット支援手術による多くの婦人科疾患の手術実績があること、そして、手術手技および周りのスタッフの動きや症例数などが総合的に評価された結果だと思っています。選定基準はインテュイティブサージカル社が規定しており、本学では把握していません。しかし、ロボット支援手術の手法向上のための継続的学習支援を目的とするリモート症例見学を通じて、若手医師の教育に力を入れていくという点で、同社と共感できた点も大きいのではないかと考えています。

本学のリモート症例見学は「実際に手術を施行している人」を対象にしているため、リモートで1から学ぶというよりも「復習」という意味合いが大きいのが現状です。しかし私としては、まずはリモートで見学してから実地の見学をしても問題はないと考えているほど、精度の高い内容になっていると思っています。

◆近藤 英司（こんどう・えいじ）氏

1996年山口大学医学部卒業。1996年三重大学医学部附属病院医員、1999年松阪中央病院産婦人科、2000年山田赤十字病院産婦人科、2005年三重大学医学部附属病院助手・助教。2013年三重大学医学部附属病院婦人科病棟医長、がん研有明病院、2016年三重大学医学部附属病院婦人科病棟医長を経て、2019年から三重大学大学院医学系研究科産科婦人科学准教授。婦人科腫瘍学、内視鏡手術、ロボット手術、細胞診断学を専門としている。

【取材・文＝中西美穂（写真は病院提供）】